発問例

●二〇四ページ

問 **「いもり」（3行目）の登場場面までの風景描写がこの作品全体の構成の上で果たしている役割について考えてみよう。**

答 次に続くいもりの死への、前奏としての役割を果たし、秋の夕暮れの冷ややかで物静かな感じを作り上げている。

補 「黄泉の国」のイメージを読み取る説と、あくまでも実際の景色の描写であるとする説の2通りの研究論文がある（「語句の研究」や「キー・ポイント「桑の木の場面について」参照）。

●二〇五ページ

問 **◉「生き物の寂しさ」（8行目）とは、どのようなことか。**

答 生死が偶然によって左右されていること。

補 主人公がいもりを殺す意図を持っていなかったことからすると、いもりの死は偶然であったと言える。

問 **「いもりは偶然に死んだ。」（9行目）とあるが、いもりの死が偶然であったことはどのように描かれているか。適当な部分を二〇四～二〇五ページから順に抜き出しなさい。**

答 ・いもりを驚かして水へ入れようと思った。
・別にいもりを狙わなかった。
・それが当たることなどは全く考えなかった。

問 **「しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。」（14行目）のはなぜか。**

答 蜂・ねずみ・いもりの死から、自身のことに思いをはせるときに、その生がひどく単純で不確かな要因に支配されていることに気づき「寂しい」気持ちが起こってしまったから。

問 **「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。」（15行目）のはなぜか。**

答 偶然が生き物の生死を支配すると実感したとき、今まで抱いていた生と死とは正反対のもの、両極端なものという思いが否定され、生死の境界は極めて不確実なもの、あいまいなものと思うようになったから。

●二〇六ページ

問 **「そういう気分」（2行目）とは、どのようなことか。**

答 「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」（二〇五・16）こと。

補 偶然ながらも生きて歩いていることに「感謝しなければ済まぬような気」がするが、「実際喜びの感じは湧き上がっては」こない。生きることへの確実な実感を持てなくなった主人公の衝撃を、感覚と思念の両面から表現している部分である。

問 **◉「三週間いて」（3行目）とは、どのような心情を表しているか。**

答 冒頭に「我慢できたら五週間くらい」と書いてあるので、我慢しきれなかったことがわかる。城の崎が、自分が死と向き合う場である、ということの重さに耐えきれなくなったと考えられる。

問 **◉「もう三年以上になる」（3行目）という時間の経過の記述は、どのような効果を付け加えているか。**

答 脊椎カリエスの危険性も脱したものの、生き延びてほっとしたというよりは、怪我当時の死生観が持続していることを表している。

●まとめ

問 **「蜂」「ねずみ」「いもり」について、それぞれの描写の特徴を説明しなさい。**

答 蜂＝忙しく立ち働く蜂と、死んで動かない蜂が鮮明に描かれており、生死の対照が印象的に焼きつけられる。ねずみ＝必死にもがくねずみの動騒の恐ろしさが描かれ、あひるののんきな描写を挟んで鮮明な印象を与える。いもり＝死んでいく過程が短文で明確に描かれており、偶然に支配されてはかなくも死んでしまう生き物のあり方が不気味なまでに述べられている。

問 **この作品の主題を、三つの小動物の死に言及して一三〇字程度でまとめなさい。**

答 蜂の死から、死に対して静かさ、親しみを

感じ、ねずみの動騒から、静寂の前の恐怖を感じつつも、「あるがまま」に生きようと思い、いもりの死から、偶然に支配される生き物の寂しさを共感し、生と死は両極ではなく、それほどに差はない、という心境になっていく。（一二二字）

語句の研究

●二〇三ページ

6またしばらくして　作者の日記によると、城崎温泉で「蜂の死と鼠の竹クシをさされて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。」とあるのが十月三十日。そして十月三十一日の項に「やもりに石を投げたら」死んでしまったことが書いてある（やもりは誤記）。城崎到着二週間後のことである。

9物が全て青白く……そわそわとさせた。　ここでの「物静かさ」は主人公を「かえって」「そわそわ」とさせており、それまで「親しみ」を感じていた「静かさ」とは質的に異なる「物静かさ」である。よってこの「物静かさ」は「死」の象徴としての「静かさ」ではなく、あくまでも実景の描写としてとらえることができる。一方で「物が全て青白く、空気の肌触りも冷え冷えとして」を、一九七・10～11の「青い冷たい堅い顔をして」墓の下に寝ている死骸の部分と対応させて、桑の木の場面をいもりの死に向けた不気味な前奏的表現と考える立場もある（→キー・ポイント　桑の木の場面について　参照）。

15原因は知れた。　「参考」欄に掲示してある通り、すでに明確に言語化されていた桑の木の葉の「原因」をあえて削除した桑の木のエピソードを挿入することで、いもりの場面に向けて、秋の夕暮れの冷え冷えとした雰囲気を作り上げることができたという作品効果を重視したい。

キー・ポイント　桑の木の場面について　桑の木の場面は従来「黄泉の世界」のイメージを読み込む立場と実景の描写として読解する立場の二通りに解釈が分かれている記述であり、指導上においても扱いが難しいところである。確かに「物が全て青白く」など、「黄泉の世界」を連想させる記述は多く、また「いつまで行っても、先の角はあった」（二〇四・1）として桑の木の場面からの連続性が示唆されるいもりの死においても、多様な読みを可能とする。だが逆説的に言えば、「黄泉の世界」を前提とした読解は、「黄泉の世界でいもりを殺す」という形で読解への大きな影響をもたらし、結果として主人公の死生観を必要以上に観念的なものにしてしまう恐れがある。本教材では、「教材のねらい」にもある通り、文章の意味それ自体を読み取る練習をしたい。したがって本指導書においては桑の木の場面を実景の描写として読解し、桑の葉が動く原因を明確にしないことによる作品効果（＝いもりの場面に向けた雰囲気を持続させる効果）を重視している。

●二〇四ページ

5自分は先ほどいもりは……しかしもうそんなことを考えなくなっていた。　直接生・死に関連しない文章であるが、後の展開の偶然性への伏線ととらえることもできる。心底嫌いだったり、逆に好きだったりしたら、石を投げて驚かせてやろうとする気も起きないはずである。

14石はコツといってから流れに落ちた。……もう動かない。いもりは死んでしまった。　死骸を見つけた「蜂」、死への動騒まっただ中の「ねずみ」の段落には見られない、生から死への瞬間の描写である。いもりを襲った突然の死を、短文や「た」止めを駆使してたたみかけるように表現している。極めて印象的な感銘を読み手に与える迫力も味わわせたい。

●二〇五ページ

7いもりの身に自分がなってその心持ちを感

じた。　いもりの描写から、その死が全くの偶然であったことが知れる。「自分に妙な嫌な気をさした。」（二〇五・5）のは罪悪感からでなく（「虫を殺すことをよくする」（二〇五・4）とある）、「偶然性」によるものである。すなわち、いもりも自分も、その生命を「偶然性」に支配されている「生き物」であるということの実感が「妙な嫌な気」を起こさせ、「生き物の寂しさ」（二〇五・8）という気分として定着したのである。そしてこの実感は、いもりのそれと全く同じであるという意識から「いもりの身に自分がなって」という気持ちも生じさせたのである。

8 生き物の寂しさをいっしょに感じた。　いもりや蜂、ねずみ、また人間でもなく「生き物」としている点に注意したい。主人公は「死ななかった」ことに感謝すべきであると思うものの、一方では「死」と「生」にはそれほどの差はないという感慨に思い至っていくのである。「偶然」によってその生命を支配されるのは「生き物」全ての寂しい運命であるという感慨である。

14 しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。　偶然にも生き残ることができたという喜びよりも、偶然に支配される生き物の寂しさのほうが「自分」をより強くとらえていたからである。文脈から理由を指摘させるならば、すぐ後の「生きていることと……両極ではなかった。それほど…気がした。」がこれにあたる。前行「気もした」とあわせてロード・クライブで読んだ使命感に実感が伴わなかったこととの対応を見ることもできる。

15 生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　「両極」は遠く離れた正反対のものという意味。「偶然が生き物の生死を支配する」と実感した以上、生と死の境界は極めて不確実で、従来自分が考えていたような相互反極関係（正反対、両極端）ではないということ。

キー・ポイント　生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　死に隣接した事故の体験をもとにして、生き物の生と死について観照してみると、それまで両極と思っていたものが、さほど差のないものだという心境になった。生と死とは偶然の律に支配されていて、ひょっとした拍子で生は死へと暗転する。それは例えば「どうしたのかしら」（二〇四・16）と思うほどに損傷のないまま死んだいもりの死骸や、二〇五での蜂やねずみの死骸のイメージ（ありや魚などに食べられず、損傷のないまま静かにあり続けるイメージ）に共通する、存在の連続性とあわせ考えれば、主人公にとって死はこの世との永の別れではなく、単に存在形式が変化したに過ぎない一形態であるともいえよう。生と死についての新たな視野を獲得したのである。

16 視覚は遠い灯を……ただ頭だけが勝手に働く。　「足の踏む感覚も」（二〇六・1）と並列の助詞で並べていることから、視覚、触覚とも不確かなのだといえる。すなわち、遠い町の灯をはっきりそれと意識しているわけではなく、また足下を確認するわけでもない。更に頭も、身体的、感覚的条件に結びついていない状態で、知覚がただ勝手に働いているのである。言いかえれば、主人公は必然性があって生きているのだという実感が消失し、不確かな身体性と相まって、偶然生きているのだという考えだけが勝手に進んでいる状態だといえる。結果的に城崎温泉の滞在を三週間で我慢しきれなくなった主人公の衝撃の大きさを感じ取るようにしたい。

●二〇六ページ

3 自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。　「助かった」ことが「脊椎カリエスになる」ことだけに限定されていることに注意したい。逆に言えば、他のことは継続中であ

って、全てのことが助かったわけではなかった。

注意する語句

（＊で用例を示した）

肌触り…肌に接したとき受ける感じ。
＊肌触りを確かめる。

物静か…ひっそりとして静かなさま。
＊物静かな街を歩く。

何気なく…明確な目的や意図なく物事を行うさま。また、そのように見えるさま。さりげなく。
＊隣の席の彼女に何気なく話しかける。

肘を張る…肘を張り出していかにも強そうに装う。肘張る。
＊精一杯の虚勢を示すために彼は肘を張った。